

平成 30 年 5 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02051

研究課題名(和文) 古代キリスト教のシリア語・コプト語伝承に関する(特に翻訳の問題をめぐる)基礎研究

研究課題名(英文) studies in ancient Christian traditions in Syriac and Coptic, with special attention paid to the problem concerning translation

研究代表者

戸田 聡 (Toda, Satoshi)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20575906

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：当初企図した方法では研究成果が必ずしも予想どおりに挙がったわけではないが、シリア語については、研究を進める中で関連する別の問題に行き当たり、これについて、研究代表者が以前に得ていた研究成果と突き合わせて検討を行なうことによって、新たな成果への道が開けつつあるとすることができる。

他方コプト語については、これまた関連する別の問題に行き当たったが、こちらはコプト学自体の中で既に100年以上にわたって論争が続いている学問上の難問であり、これについては、解明のための手がかりはいくつか得ることができたものの、研究上の最終的な突破口を見いだすまでには未だ至っていない。

研究成果の概要(英文)： Although the results obtained do not necessarily correspond to the methods initially adopted, as for Syriac, the researcher came upon a different but related problem connected to Syriac Gospel tradition, and utilizing results of different researches earlier pursued by the researcher himself, the researcher is now on the way toward arriving at a new perspective on Syriac Gospel tradition.

As for Coptic, on the other hand, the researcher was led again toward a different but related problem, which is concerned with the so-called Pachomian dossier. However, the problem concerning this dossier is known to be notoriously difficult in the field of Coptology, and which is still unsolved after diverse controversies over a century. The researcher has obtained some ideas which might turn out to be clues to the clarification of the problems, but frankly no final breakthrough has yet been found.

研究分野：古代キリスト教史

キーワード：古代キリスト教 ギリシア語 シリア語 コプト語 翻訳

1. 研究開始当初の背景

本研究は、これまで科学研究費等の助成対象となったか否かにかかわらず、研究代表者自身がこれまで取り組んできた研究それ自体を表現したものであり、あえて背景を言うのであれば、研究代表者のこれまでの研究自体が「研究開始当初の背景」である。

これをより具体的に述べれば次のようになる。すなわちそもそも、セム語圏で活動したイエス・キリストの言行の記録を中心とするいわゆる新約聖書が、セム語でなくギリシア語で書かれたのはなぜか。無論、この言語的ねじれは、キリスト教成立の所以を研究する上での大問題の一つであり、従来から様々な形で論じられてきた。ただ、従来の研究では、イエスの個々の言葉のセム語（ヘブル語ないしアラム語）的背景が指摘されるなどしてきたが、その種の個別的指摘を超えて、いったいいかなるギリシア語的環境 milieu が新約諸文書（特に、イエスの言行を記した諸福音書）を産出したのかという総括的な問題に関しては、個々の研究者の仮説提示は見られるものの（例えば M・ヘンゲル）見解の一致は未だ存在しない。

無論この問題は、共観福音書のうちどれが最初に成立したかを問う共観福音書問題など、新約聖書学上の大問題をも巻き込むため、研究者の見解が分かれるのは無理からぬ面があるが、この関連で特に指摘すべきは、特に新約聖書学者などの場合、問題の史的連関、とりわけ、新約聖書以降（2～4世紀）の状況、に対する理解が薄弱だという点である。具体的に言えば、新約諸文書を生み出した milieu はその後も或る程度変容を伴いつつ存続し、2世紀前半のものとして使徒教父たちの著作などはその現れだと理解できるが、新約聖書学者による使徒教父文書の扱いは、それらに見られる聖書引用への注目といった程度にとどまることが稀でない。また、同様の milieu は、ユダヤ的キリスト教の潮流の中でその後も保存されたと考えられており、その重要な分枝としてシリア語キリスト教（例えば4世紀前半の作家アフラハトに見られるキリスト教。なおシリア語はアラム語の一方言）が挙げられるが、これに至っては新約聖書学者の関心の全く埒外だと言ってよい。しかし従来の方法では、キリスト教をギリシア化された相においてもっぱら見ることになり、上記の言語的ねじれに象徴されるように複雑なありようを呈する初期キリスト教をより明快に把握することは、まず期待できない。比較的に見ていわゆるギリシア化を免れたそのような潮流を時間的に遡行し、それら後代のキリスト教に看取される特徴の源泉を探求するという仕方、初期キリスト教の milieu のより明快な把握を試みることは、決して不可能でなく、そし

てこのような研究方途は従来充分切り開かれてきたとは到底言いがたい。まさにこれが、本研究が目指す重要な方向性である。そしてこの場合、時間的遡行に当たっては、ギリシア語伝承からの翻訳、とりわけギリシア語からシリア語への翻訳、を考察対象とすることが不可欠である。

以上、初期キリスト教（最初期を含む）のより明快な把握のためには、2～4世紀のキリスト教の状況を詳細に知ることが重要だと述べたが、この関連で重要なもう1つの古代キリスト教伝承として、コプト語による伝承、特に、4世紀に書写されたとされるナグ・ハマディ写本所収の諸文書が挙げられる（またこの他に、4～5世紀に書写されたと考えられるマニ教コプト語写本所収の諸文書も注目されてよい）。1950年代以降順次公刊されてきたナグ・ハマディ写本所収の諸文書は、特にグノーシス主義研究との関連で盛んに研究されているが（例えばカナダのラヴァル大学監修の叢書 *Bibliothèque copte de Nag Hammadi*）本研究の視角からすれば、それらコプト語諸文書の文言が、オリジナルだと通常考えられているところのギリシア語ではどう表現されていたと考えられるかという問題との関連で、従来の研究にはなお不十分さが残る。もちろんこれには理由があり、特に20世紀初頭頃にいわゆる反訳（この場合に即して言えば、コプト語文書からギリシア語オリジナルを復元すること）の濫用が反省点となり、研究上ギリシア語への復元の試みがやや抑制的になっている面があると理解できる。しかしながら、以前の反訳を踏襲するのではないとしても、ギリシア語への復元という視角は、（当の文書の著者たちがもともとギリシア語で思考していたことを思えば）当該文書の内容を正確に理解するために当然不可欠であり、そしてこの視角はまさにそのまま、シリア語文献に関連して上述したのと同じく、翻訳の問題への視角だと言ってよい。以上、この段落で述べたことをまとめると、グノーシス主義が隆盛を極めたとされる2世紀のキリスト教に関する一層明確な画像は、それ以前すなわち最初期のキリスト教を遡行的に理解するための史的背景として極めて重要であり、そしてそのような画像を得るためには、ギリシア語からコプト語への翻訳の問題は、研究上の鍵となると言える。

以上、シリア語とコプト語という2つの分野における翻訳の問題の重要性について述べたが、これを同一の研究者が取り扱う意義についても一言しておかねばならない。我が国における研究者層の薄さはもとより自明だが、それだけでなく、コプト語文書の翻訳底本 *Vorlage* の言語としてギリシア語でなくシリア語が想定される、或いは少なくとも主張される、場合が存在するのである。これは特に上述のマニ教コプト語写

本所収の諸文書の場合によく見られ、確かに、3世紀に成立したマニ教の場合には、マニが著作に使用した言語は基本的にアラム語（シリア語）なので、マニ教コプト語文書の Vorlage 自体もシリア語だった可能性は、一概には否定できない。しかも、ナグ・ハマディ写本とマニ教コプト語写本の間に見られる言語的類似性から、両者の間の関連を考える研究者すらいる。これらに鑑みるなら、そのような説の当否を判断できるよう、コプト語文献の翻訳の問題を扱う研究者が同時にシリア語を扱えることの重要性は明白だろう。

そして最後に、本研究が扱う問題、とりわけ冒頭に掲げた言語的ねじれの問題との関連で、これまで触れなかった重要な分野に言及せねばならない。それはいわゆる聖書ギリシア語に関する研究の分野である。新約聖書がなぜセム語でなくギリシア語で書かれたかという問題は、狭義の言語学的研究を超えた意味での聖書ギリシア語研究の最大のテーマでなければならず、無論その方面での研究は既に種々存在するが、決定的な解答はなお得られていない。この点に関する研究代表者自身の当該分野での研究はなお試行錯誤の段階にあるが、以上述べた本研究と並行する形で、応募者は聖書ギリシア語に関する研究にも鋭意取り組みつつある。そして本研究自体は、聖書ギリシア語それ自体の研究を前提としそれとの関連に留意しつつも、東方諸語特にシリア語・コプト語に関する（特にギリシア語からの翻訳の問題に関する）研究を目指すこととした次第である。

2. 研究の目的

1. に述べたところから明らかなように、シリア語やコプト語で伝わる古代キリスト教文献をギリシア語との関係、特に翻訳の問題、に即して検討するのが本研究の目的だった。

3. 研究の方法

ギリシア語からシリア語・コプト語への翻訳という問題を研究するために、特に最初期のシリア語文献やナグ・ハマディ写本所収のコプト語文献等に含まれるギリシア語を分析することが、本研究の主たる研究方法として当初企図したものだ。

4. 研究成果

当初企図した方法では研究成果が必ずしも予想どおりに挙がったわけではない。とはいえ、成果はそれなりに上がりつつあり、今後さらなる進展が期待できるものもある。

まずコプト語関連では、平成28年度では国際コプト学会に参加して研究発表を行なった。但し諸般の事情により、研究発表の内容は、当初期していた「ナグ・ハマディ写本所収のコプト語文書」の分析ではなく、コプ

ト学上で百年以上未解決とされてきた（したがって、コプト学自体の上での意義は極めて大きいと言える）パホーム文献に関する分析となった。パホーム文献の著作原語が何語かを特定することによって解決されるべきこの問題は、何人もの研究者がこれまで手がけてきて解決に至らなかった難問であり、研究代表者による研究発表も、いくつか有力な手がかりを得たとは言えるものの、最終的な問題解決には未だ至っていないと言わざるをえない。この点については今後さらに検討を重ねる必要がある。

他方シリア語関連では、まず平成28年度に、韓国ソウル市で開催された SBL International Meeting に参加してシリア語関連の研究発表を行なった。シリア語の福音書伝承に関するものであるこの研究発表自体は、なお荒削りな段階にはあるものの、ギリシア語とシリア語のキリスト教的伝統（特に聖書文書の伝統）の交錯に関する興味ぶかい問題に接しており、今後さらなる展開が期待できるものとなった。そしてこの研究発表との関連で、方法的にシリア語キリスト教の初期の重要著作家であるエフレムにおける聖書（福音書）引用の問題について急遽検討する必要が生じ、これに関して所属大学の紀要で研究論考を公刊した。そして平成29年度には、同じく SBL International Meeting（この年はドイツ・ベルリン市で開催された）に参加して、同様にシリア語の福音書伝承に関する発表を行なった。この発表は、前年度の同 Meeting での発表を深化させたものであり、聴講者からも積極的な反応が返ってくる内容となった。今後はさらに細部を詰め、同発表を何らかの形で論文として活字化する作業が重要となる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文等〕（計11件）

戸田 聡「いわゆる「キリスト教のギリシア化」をめぐって」『キリスト教（立教大学）』59(2017)65-84 [査読あり]

TODA Satoshi, "Some Observations on Greek Words in Coptic Manichaean Texts", in: Samuel N.C. Lieu (ed.), *Manichaeism East and West* (Corpus Fontium Manichaeorum. Analecta Manichaica 1), Turnhout: Brepols Publishers, 2017, pp. 242-248 [査読あり]

TODA Satoshi, "A Memorandum for the Synoptic Problem", *Bulletin of the Graduate School of Letters, Hokkaido University* 152 (2017) 1-36 [査読なし]

TODA Satoshi, "Reexamining Ephrem the Syrian's Quotations of the Gospels", *Journal of*

the Graduate School of Letters (Hokkaido University) 12 (2017) 1-18 [査読なし]

戸田 聡「初期キリスト教と聖書翻訳」『北海道大学文学研究科紀要』150 (2016) 159-199 [査読なし]

TODA Satoshi, “An Addendum to “Patristic Studies in East Asia (Mainly in Japan)” ”, Bulletin of the Graduate School of Letters, Hokkaido University 149 (2016) 1-5 [査読なし]

TODA Satoshi, Review of Michael Bland Simmons, Universal Salvation in Late Antiquity: Porphyry of Tyre and the Pagan-Christian Debate (Oxford studies in late antiquity), Oxford & New York: Oxford University Press, Bryn Mawr Classical Review 2016.06.33 [査読あり]

TODA Satoshi, “La personnalité historique d'Arsène le Grand”, in: Entre texte et histoire: Etudes d'histoire médiévale offertes au professeur Shoichi Sato, Paris: Editions De Boccard, 2015, 366-373 [査読あり]

TODA Satoshi, “Patristic Studies in East Asia (Mainly in Japan)”, in: Patristic Studies in the Twenty-First Century: Proceedings of an International Conference to Mark the 50th Anniversary of the International Association of Patristic Studies, Turnhout: Brepols Publishers, 2015, 125-143 [査読あり]

戸田 聡「最初期のキリスト教をどう理解するか：ジャン・ダニエルの所説の射程」『基督教學』(北海道基督教会) 50 (2015) 1-36 [査読なし]

戸田 聡「マニ教資料翻訳集成(1) リュコポリスのアレクサンドロス『マニカイオスの教説に対して』」『北海道大学文学研究科紀要』146 (2015) 209-239 [査読なし]

[学会発表](計9件)

TODA Satoshi, How and To What Extent Did Mani Know the New Testament? Paper read at the 9th International Conference International Association of Manichaean Studies, University of Turin and Museo d'Arte Orientale Turin, Torino, Italia 2017年9月

TODA Satoshi, The So-Called “Hebrew Urmatthäus” and the Syriac Gospel Tradition. Paper read at the Society of Biblical Literature 2017 International Meeting, Berlin, Germany 2017年8月

TODA Satoshi, The So-Called Hellenization of Christianity and Origen. Paper read at Origeniana Duodecima: Origen's Legacy in the Holy Land –

A Tale of Three Cities: Jerusalem, Caesarea and Bethlehem in Late Antiquity, Hebrew University of Jerusalem, Israel 2017年6月

TODA Satoshi, Written Documents as Fixed Points in the Earliest Life of the Text of the Gospels - Rethinking the Synoptic Problem. Paper read at the 10th Birmingham Colloquium on the Textual Criticism of the New Testament "Lives of the Text". University of Birmingham, U.K. 2017年3月

TODA Satoshi, The Eusebian Canons: A Neglected Tool for the Interpretation of the Gospels. Paper read at the 10th Annual Conference of the Asia-Pacific Early Christian Studies Society, Saint Petersburg, Russia 2016年9月

TODA Satoshi, Rethinking the Original Language of the Book of Judith. Paper read at the XXII Congress of The International Organization for the Study of the Old Testament (IOSOT) in conjunction with The International Organization for Septuagint and Cognate Studies (IOSCS) etc., Stellenbosch, South Africa 2016年9月

TODA Satoshi, Coptic literature and the Pachomian dossier. Paper read at the 11th International Congress of Coptic Studies, Claremont Graduate University, California, USA 2016年7月

TODA Satoshi, Rethinking the Syriac Contribution to Problems concerning the Diatessaron. Paper read at the Society of Biblical Literature 2016 International Meeting, Seoul, South Korea 2016年7月

TODA Satoshi, Judaeo-Christian Gospel Tradition Revisited. Paper read at the 17th International Conference on Patristic Studies, Oxford, U.K. 2015年8月

[図書](計1件)

戸田聡編訳『砂漠に引きこもった人々 キリスト教聖人伝選集』、教文館、2016年、307頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

戸田 聡 (Toda Satoshi)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20575906